



株式会社 UACJ

アルミ缶リサイクルに関する事業説明会

2026 年 10 月 19 日

イベント概要

[企業名]	株式会社 UACJ
[企業 ID]	5741
[イベント言語]	JPN
[イベント種類]	アナリスト説明会
[イベント名]	アルミ缶リサイクルに関する事業説明会
[決算期]	
[日程]	2026 年 10 月 19 日
[ページ数]	37
[時間]	13:00 – 13:57 (合計：57 分、登壇：35 分、質疑応答：22 分)
[開催場所]	インターネット配信
[会場面積]	
[出席人数]	61
[登壇者]	6 名 執行役員 コーポレートコミュニケーション本部長 上田 薫 (以下、上田) 福井製造所 所長 兼 UACJ 山一アルミ缶リサイクル株式会社 代表取締役 社長 坂野 公則 (以下、坂野)

UACJ 山一アルミ缶リサイクル株式会社取締役 副社長

正田 宗之（以下、正田）

ものづくり基盤本部 未来へ環境をつなぐ部 部長

野瀬 健二（以下、野瀬）

板事業本部 缶材営業部 部長 森脇 一人（以下、森脇）

コーポレートコミュニケーション本部 IR・広報部長

須藤 元康（以下、須藤）

[アナリスト名]*

SMBC 日興証券

山口 敦

UBS 証券

五老 晴信

野村證券

松本 裕司

モルガン・スタンレーMUFG 証券 白川 祐

*質疑応答の中で発言をしたアナリスト、または質問が代読されたアナリストの中で、SCRIPTS Asia が特定出来たものに限る

登壇

須藤：定刻となりましたので、株式会社 UACJ、アルミ缶リサイクルに関する事業説明会を開始いたします。本日はお忙しい中、ご参加いただき、誠にありがとうございます。

開会に先立ちまして、注意事項を申し上げます。

議事の記録のため、本説明会の録画・録音をしております。ご出席の皆様による録画・録音は、ご遠慮くださいようお願いいたします。また、本日は弊社ホームページ掲載の説明資料を用意して進行いたします。お手元に資料をご用意されていない方がいらっしゃいましたら、お手数ですがホームページをご覧ください。

本日の事業説明会の当社出席者をご紹介します。

執行役員、コーポレートコミュニケーション本部長、上田薫です。

須藤：板事業本部福井製造所長、兼 UACJ 山一アルミ缶リサイクル株式会社取締役社長の坂野公則です。

坂野：坂野でございます。よろしくお願いします。

須藤：UACJ 山一アルミ缶リサイクル株式会社取締役副社長、正田宗之です。

正田：正田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

須藤：ものづくり基盤本部、未来へ環境をつなぐ部部长、野瀬健二です。

野瀬：野瀬と申します。よろしくお願いいたします。

須藤：板事業本部、缶材営業部部长、森脇一人です。

私は本日司会を務めます、コーポレートコミュニケーション本部 IR・広報部長、須藤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、コーポレートコミュニケーション本部長、上田よりごあいさつ申し上げます。

上田さん、よろしくお願いいたします。

上田：皆様、本日はご参加いただきまして誠にありがとうございます。コーポレートコミュニケーション本部長、上田でございます。オンラインで視聴の皆さん、そして何より会場である福井まで足をお運びいただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

近年、持続可能な社会の実現に向け、サーキュラーエコノミーへの転換が急務となっております。中でもリサイクルの推進というのが、当社における中期経営計画の中核を担う重要テーマとなっております。本日

は、主に日本のアルミ缶に特化してリサイクル事業の進捗状況とか、今後の展望について、皆様により深くご理解いただければと思っております。

限られた時間ではございますが、本日はよろしくお願いいたします。

須藤：上田さん、ありがとうございました。続きまして、本日のプログラムをご紹介します。

本日は二つのご説明と、その後、質疑応答を予定しております。一つ目は、資源循環の最前線－アルミ缶リサイクルと題し、未来へ環境をつなぐ部、野瀬よりご説明いたします。二つ目は、資源循環の最前線－缶材マーケットと題し、缶材営業部、森脇よりご説明いたします。両説明の終了後に、質疑応答のお時間を設けております。

ご説明に移ります。資源循環の最前線、アルミ缶リサイクルにつきまして、野瀬さん、よろしくお願いいたします。

アルミ飲料缶を、より良く理解する

アルミの性質、飲料容器素材に求められる特性と使われ方から、資源の循環利用が高度に発達した理由をご説明いたします。



Aluminum lightens the world
アルミでかなえる、軽やかな世界

© UACJ Corporation. All rights reserved.

野瀬：野瀬より、資源循環の最前線－アルミ缶のリサイクルということでのご説明をさせていただきます。

まず、アルミの飲料缶について、より詳しくご説明を差し上げて、そのアルミの特性というものが、なぜ飲料缶容器に適切であるかということ、そして今、時代に求められている資源循環において、非常に効果的であるということについて、ご説明を差し上げたいと思います。

アルミ飲料缶の特長 -素材の力が生かされている



✓密封性

おいしい缶ビールを飲むコツは？

✓軽量性・熱伝導性

輸送費低減、冷却時間の短縮

✓大量・同一生産に好適

© UACJ Corporation. All rights reserved.

2

普段、アルミニウムの缶を、特に意識されて使っている方はいらっしゃるかと思います。アルミの飲料缶には大きく三つの特徴があると考えております。

一つ目は密封性でございます。

ビール好きの方から聞いた話なんですけれども、スーパーやコンビニで買うビールを美味しく飲むコツがあるそうです。製造年月日の近いものを買うというのが一つのコツだと聞きました。

ビールのような非常に風味に敏感な飲み物は、鮮度が美味しさに直結して、これが消費者の大きな価値になっているという、そういった説明でございました。

飲料容器としてアルミ缶が選ばれる理由を考えると、やはり圧倒的に高い密封性でございます。プラスチックの容器のように、ガスをわずかに透過することもございませんし、光も透過しませんので、これは保存容器としては非常に優れたものとなっております。

二つ目、軽量性・熱伝導性という特徴もございます。

これは、輸送費の低減や冷却時間の短縮で、例えばコンビニのエネルギーの効率を高めるとか、自動販売機における販売チャンスを拡大できるといった経済的な効果につながると考えられます。

三つ目、大量・同一生産に好適と書かせていただきました。

飲料缶を見たときに、すぐにお気づきかと思うんですけれども、パッケージのデザインは多様でありながら、その缶のサイズは多くはないということは、お気づきの通りかと思います。アルミの飲料缶を考えると、特に大量生産で同じものを作ったときに経済的な効果が出やすいような、そういった素材であり、そういった製造工程がとられております。

これが、アルミ飲料缶のアルミの素材という視点から見た特徴となります。

アルミ飲料缶の素材としての特長 -リサイクルの観点から



✓区別可能



✓モノ(金属)としての価値



✓経済合理性に基づいた回収網

© UACJ Corporation. All rights reserved.

3

これらの特長を、今日の主題でございます、リサイクルという点でご説明をしたいと思います。

アルミはリサイクルの優等生といわれており、その中でも特にアルミの飲料缶というのは、リサイクルが進んだものとなっております。

その大きな理由は、見ただけで区別が可能という点です。もちろんペットボトルを見たときに、ペットボトルだと認識はされるかと思うのですが、他のプラスチック、他の樹脂容器と区別ができますかというところ、一般には区別をすることは困難かと思えます。これがプラスチックのリサイクルを難しくしています。その一方で、アルミの飲料缶に関しましては、形を見ただけで世界中どこでも、これがアルミであるということが判別できます。

これが、実はリサイクルにおいて非常に重要なことです。リサイクルの最初のステップである分別することが、消費の最後の点で可能という特徴が挙げられます。

そして、アルミのもう一つの大きな特徴である、金属としての価値も、高度な資源回収が自発的に形成されるという大きな特徴を支えているものとなっております。

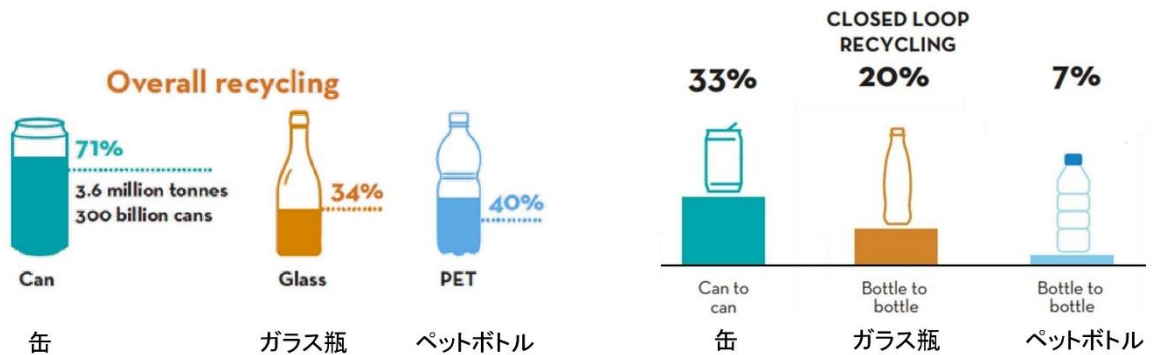
こういったことから、経済合理性に基づいて、アルミニウムの飲料缶が集められて再利用できるというプロセスが、特に日本においては著しく発達をしております。

循環に適した容器素材-アルミニウム

世界における飲料容器のリサイクルの現状

リサイクル率 (廃棄物にならずに利用される割合)

同じ容器素材に戻る割合



参照: [IAI-ALUMINIUM-The Sustainable Choice for Beverage Cans.pdf](#)

© UACJ Corporation. All rights reserved.

4

リサイクルについて世界のデータについてお示ししたいと思います。

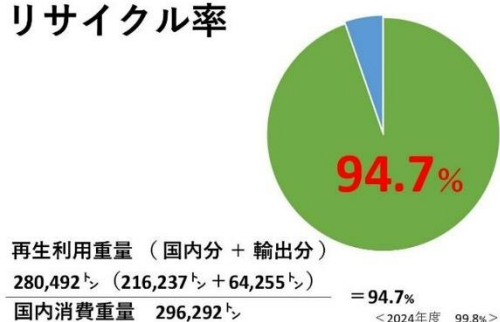
こちらが、アルミニウムのリサイクルの現状を、ガラス瓶やペットボトルという他の素材と比較したデータとなります。ここでは廃棄物にならずに回収される割合を、リサイクル率と書いて、数値を示させていただいております。調査はインターナショナル・アルミニウム・インスティテュートのデータから持ってきております。

左側の三つの図からも分かりますように、世界全体で見ても、使用されたアルミニウムの缶の70%以上がリサイクルされております。そして、右側の三つの比較から分かりますように、同じ容器に戻る割合が重要となります。CANで言いますとCAN to CANという割合がございますけれども、これも他の容器に比べて圧倒的に高いということが知られております。

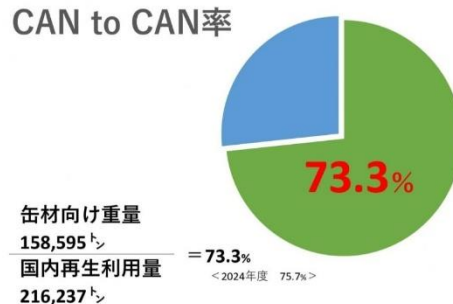
世界全体でサステナビリティを向上させるということが、さまざまな分野において試みられておりますが、アルミの飲料缶は現時点においても、かなり持続可能性の高い、循環利用されている素材だということが分かるかと思います。

日本のアルミ缶リサイクル-高い回収率と品質

リサイクル率



CAN to CAN率



参照: [リサイクル率](#) | [アルミ缶リサイクル協会](#)

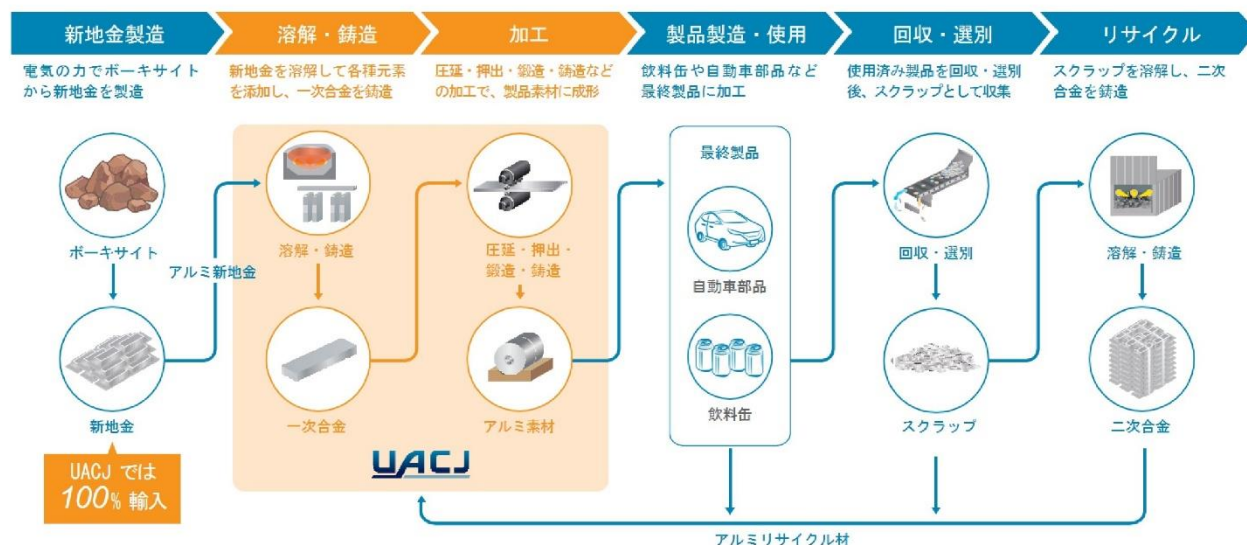
© UACJ Corporation. All rights reserved.

日本における、アルミ缶のリサイクルの割合でございます。

先ほどの世界の平均値よりも、圧倒的に高いということが分かります。年によって変動はございますけれども、最新のデータで、おおよそ 95% のアルミニウムの缶がリサイクルをされております。そして驚くべきことに、CAN to CAN 率、アルミニウムの缶がアルミニウムの缶に戻っている割合は、おおよそ 4 分の 3 にも達しております。

端的に言いますと、われわれが普段使っているアルミニウムの缶の多くは、生活者のもとで使用されたものからできているということが、ここから分かるかと思えます。

アルミニウムの資源循環



© UACJ Corporation. All rights reserved.

7

アルミニウムの飲料缶の循環を高めるということが、この昨今の一番大きな環境の問題であります気候変動と、どのように結びついているかについて、ご説明を差し上げたいと思います。

こちらは、アルミニウムの資源循環を示した図でございます。

一番左に書かれているのが新地金の製造、採掘から始まるアルミの金属を取り出す部分でございます。サプライチェーン・バリューチェーンを右に従って動いていって、理想的には下の矢印で書かれているように、アルミリサイクル材として、アルミは循環的に利用されるということになっております。

弊社 UACJ では、新地金を輸入するところからビジネスが始まります。それを溶解し、成分を整え、一次合金として作り、そちらを圧延することによって、飲料缶用の板材を作っております。

ここで私が「理想的には」と申し上げたのは、この循環のサイクルがそれほど、完全には成立していない分野もたくさんあるためです。その一方で、アルミニウムの飲料缶に関しましては、おそらくわれわれの身の回りの物の中で、最も循環が進んだ材料であり、この循環の流れが既に構築されております。

アルミニウム展伸材の環境負荷(GHG: Green House Gas排出量)



参照: [Primary Aluminium Greenhouse Gas Emissions Intensity - International Aluminium Institute](#)

© UACJ Corporation. All rights reserved.

8

このリサイクルがどれくらい重要なのかを、温室効果ガスの排出量から比較をしてみたいと思います。

こちらの棒グラフは、弊社が出荷いたしますアルミニウムの板材1キログラムを考えたときに、それが採掘まで遡ってどれくらいの温室効果ガスの排出量を負っているかということを模式図にしたものでございます。

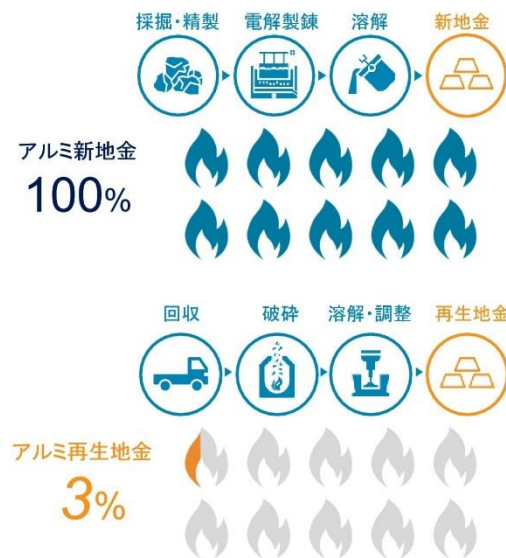
新地金の生産においては、たくさんの電力を使います。その電力の発電のために、CO₂の負荷が高いものとなっております。世界の新地金の平均は、14.4キログラムCO₂/キログラムアルミという数値が知られております。1キロのアルミを得るために、14キロものCO₂が出ております。

その一方で、弊社の中でのプロセスにおいては、1キログラムのアルミを確保するのに、およそ1キログラムのCO₂を排出しております。こういった新地金から作る素材を考えた上で、上の原料の部分をどれだけ減らすことができるかというのが重要な指標となっております。

そのための切り札が、リサイクルでございます。

アルミのリサイクルの効果

再生利用のエネルギーはわずか3%



1kgのアルミ新地金、再生地金を製造するために排出される温室効果ガス量(kg)

14.5
kgCO₂e/kgAL

0.3
kgCO₂e/kgAL

© UACJ Corporation. All rights reserved.

こちらが、アルミニウムのリサイクルの効果を示した図でございます。

一般的に 97%のエネルギーを削減できるということが知られておりますけれども、アルミニウムを再溶解するのは、製錬から金属を得ることに比べて、わずか 3%の CO₂ の排出量で同じ原料を得ることができます。これが、アルミニウムがリサイクルに優れていると言われる所以でございます。

世界全体で見たときに、この効果は絶大なものとなります。

アルミ缶の回収が環境に与える効果

社会全体での省エネ、CO₂排出削減に大きく貢献



全国世帯数(約5000万世帯)の
概ね15日分の使用電力量

参照: アルミ缶リサイクル協会「リサイクルについて」
※1 2020年に国内でリサイクルされたアルミ缶の重量
※2 日本アルミニウム協会「展伸材用スクラップ溶解のインベントリ調査報告書」

© UACJ Corporation. All rights reserved.

こちらは、アルミニウム缶リサイクル協会のデータですけれども、日本全国でおよそ 20 万トンのアルミニウムの缶が再利用されております。

このアルミ缶のリサイクルを、新地金を作るときと比べた場合には、約 300 億メガジュールのエネルギーの節約となります。このエネルギーの量は、全国の世帯のおよそ 15 日分の電力使用量にも値するような、大きな数値となっております。

消費財における「循環」という価値-アルミへの追い風

欧州PPWR(包装及び包装廃棄物規則):26年8月から段階的に施行

→アルミ缶はリサイクル可能な素材であり、リサイクル原料を多く利用しているものとして流通可能。

EUの循環経済政策での再生材利用ルール の進展

分野	名称と内容
自動車	ELV(廃自動車)規則: 再生プラスチックの利用率を義務化
バッテリー	バッテリー規則: Cu, Ni, Liなどの再生原料使用を義務化
容器包装	PPWR(包装及び包装廃棄物規則): 使い捨て容器の禁止 プラスチック包装中の再生プラスチックの使用率を義務化
建設・建物	建築資材規則: リサイクル済原料の優先利用

© UACJ Corporation. All rights reserved.

13

このような気候変動や資源循環の背景から、今、飲料缶のバリューチェーンで何が求められているか、UACJがどのような対応を行っているかについて、ご説明を差し上げたいと思います。

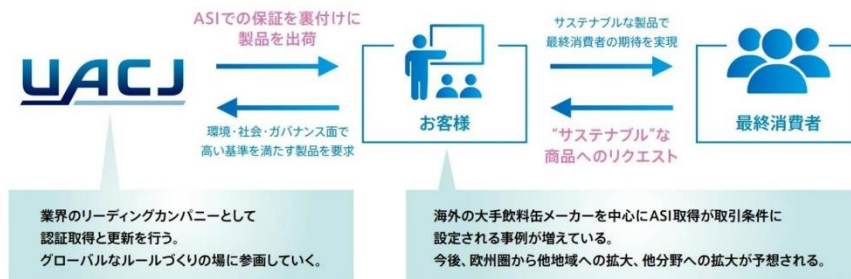
消費財におきましては、循環というものが新たな価値になりつつあります。

こちらは欧州の循環経済政策で、いろいろな分野において循環資源の利用が求められつつあることを示したものとなります。特に容器包装においては、PPWR（包装及び包装廃棄物規則）において、使い捨て容器の禁止がうたわれております。欧州を中心に、ワンウェイのプラスチックを、容器として使うことができなくなりつつあります。

その中で、先ほどご説明差し上げたような、アルミニウムの缶のような循環に適したような資源が、素材が選ばれるような状況となってきております。弊社におきましても、こうしたことに対応するような施策を打っております。

ASIとASIのCoC認証材

ASI基準名	マーク	評価軸、基準
PS基準 (Performance Standard)		製造所や事業体が、ESGに関する基準を満たしているか。
CoC基準 (Chain of Custody)		認証された材料が、採掘から最終製品まで適切に追跡・管理されているか



© UAEJ Corporation. All rights reserved.

こちらは業界団体であります ASI、Aluminium Stewardship Initiative への対応の状況を示しております。

ASI には、大きく分けて二つの基準がございます。製造所や事業体の基準であります PS 基準と、製品の基準であります CoC 基準でございます。

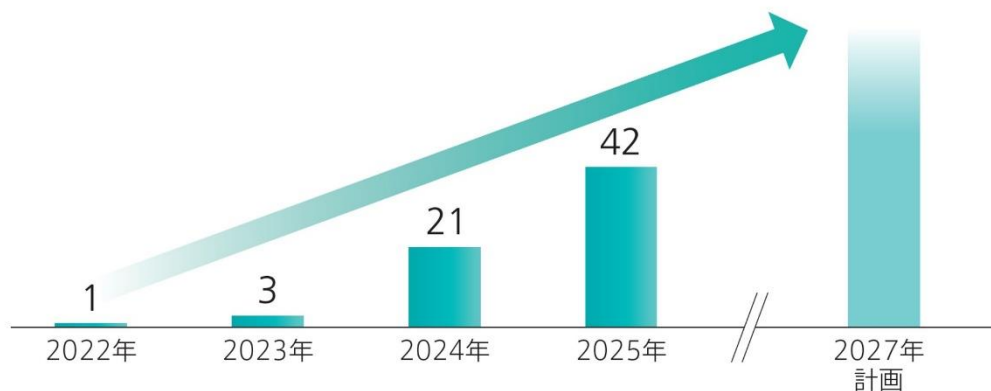
CoC におきましては、認証された材料を使って、それらを適切に管理して製品を作っているかということが問われております。福井製造所におきましても、この CoC 基準の材料を提供することができるようになっております。

循環のニーズ: ASI CoC認証材、マスバランスのインプットとしてのカウント

リサイクル材料の利用＝環境保証の原資となる。
グローバルの缶材顧客からの認証材の引き合いが増加。



ASI認証材の販売数量



※ 2022年を1として表記

© UACJ Corporation. All rights reserved.

15

このような世界的なニーズの高まりから、ASIの認証材の販売数量も、ここ4年で非常に拡大をしているのが現状でございます。

さらなる改善と技術的な見込み

水平循環の向上策

- ・リサイクルしやすい合金開発
- ・**UBC分離技術** (既存合金での還流強化)



Aluminum lightens the world
アルミでかなえる、軽やかな世界

© UACJ Corporation. All rights reserved.

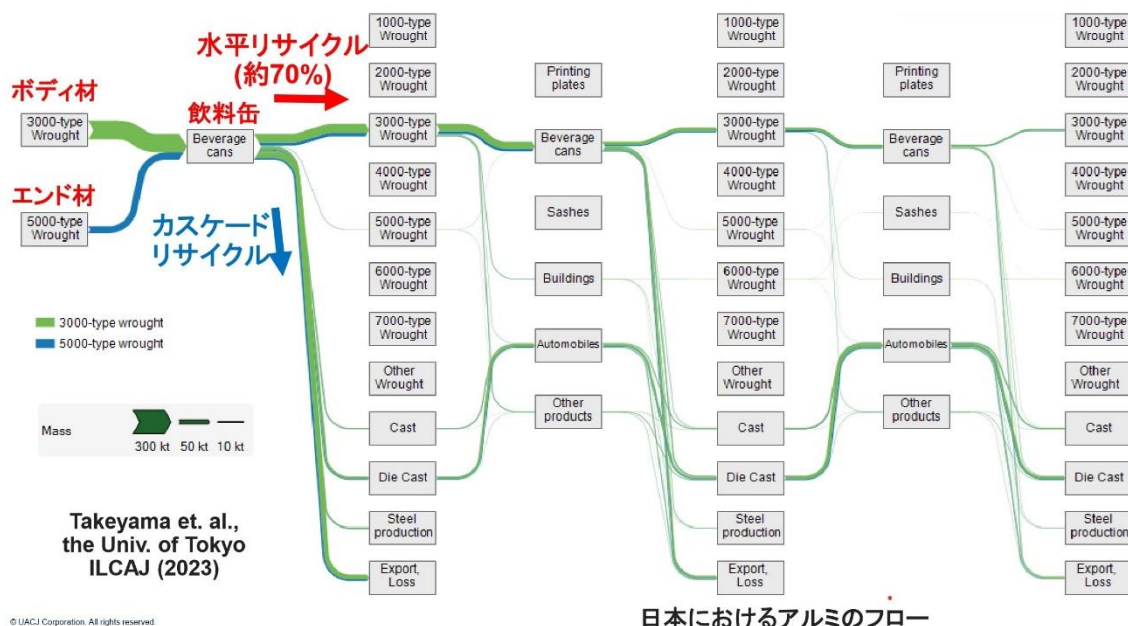
1

このような理想的な循環の状態にあるアルミニウムを、さらに優れたものにするための施策についてご説明を差し上げたいと思います。

アルミニウムの飲料缶におきましては、大きく二つの施策がございます。

一つは、リサイクルしやすい合金開発、これは後ほど森脇より説明させていただきます。もう一つは、使用済みの飲料缶、ユーズド・ビバレッジ・カン、UBC の分離技術でございます。

伸びしろはあるのか？ 水平利用の向上が持続化可能性を高める



こちらは少し複雑な図になりますが、日本におけるアルミのフローを、飲料缶の材料を出発点に書いたものとなっております。

一番左に、弊社が出荷いたします板材として、ボディ材、飲料缶の胴体の 3000 系の合金と、それからその下、エンド材、飲料缶の蓋の部分に該当します 5000 系の合金の板材を書いております。

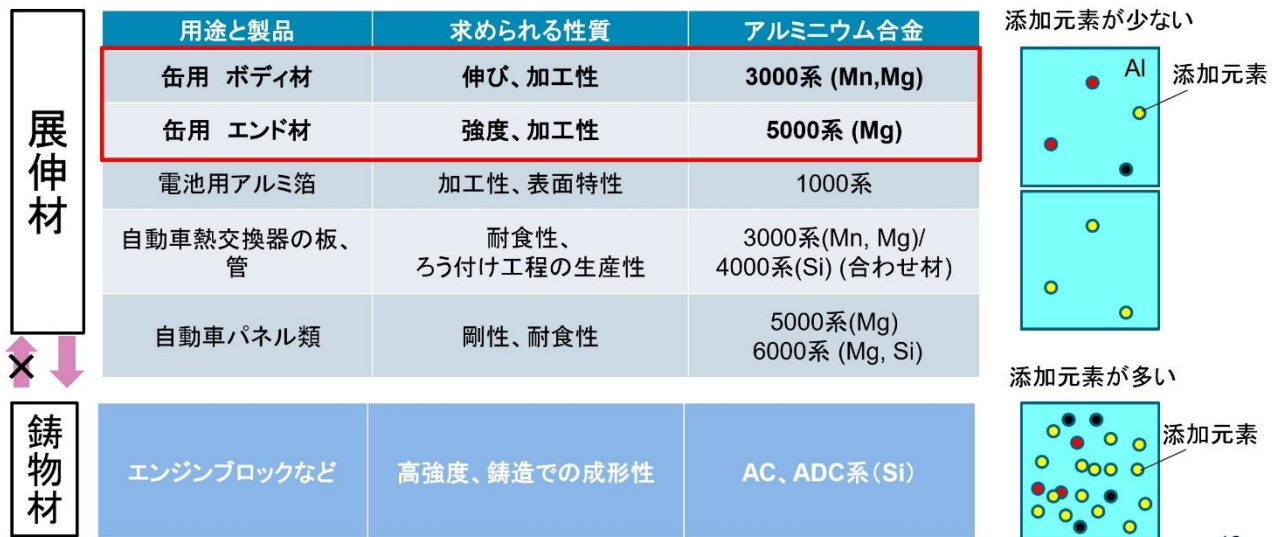
これらが飲料缶になるとときには、当然ながら結合されて、一つの飲料缶になります。

使用された後に、どのようにリサイクルされてるかとお申し上げますと、先ほど申し上げました CAN to CAN 率がおおよそ 70% という数字から分かりますように、実は水平リサイクルは 70% 程度という数値となっております。それ以外のものは、カスケード的にリサイクルされる、もしくは日本国外に輸出されるという状況でございます。

この水平リサイクルの状況を高める、より水平度を高め、持続可能性を高くしていくということが、この分野においても求められております。

アルミニウム合金のリサイクル

異なる合金への再生利用には制限がある。鋳物へのフローは一方通行



© UACJ Corporation. All rights reserved.

18

このリサイクルにおける必要要件について、もう少し詳しくご説明させていただきます。

アルミニウム合金のリサイクルについてです。この表の上には展伸材、板や押出棒のようなもののいろいろな合金、それと製品が書かれております。下には、エンジンブロックに代表されます鋳物材料が書かれております。

この展伸材の中で、飲料缶用のボディ材とエンド材は、先ほど申し上げたようにそれぞれ 3000 系、5000 系の合金から作られております。アルミニウムにごくわずかな添加元素、マンガンやマグネシウムを添加して、それによって、それぞれの部位で求められる特性を発現して、実用に供されております。

アルミニウムのリサイクルの特徴は、鉄と銅と大きく違うところがございます。これは一度添加された元素を取り除くことができないという特徴でございます。ですから、この表の上の展伸材という、ごくわずかな元素の添加で特性が大きく変わることを利用した合金と、下の鋳物材のように、シリコンを中心とするたくさんの添加元素が入った合金との間でのリサイクルには、一定の制限がございます。

簡単に言いますと、展伸材を集めてきて、表の下のアロイ材料にリサイクルすることは可能です。その一方で、逆の流れ、鋳物材を集めてきても、飲料缶のような板材は作ることができないという特徴でございます。これがリサイクルで非常に重要な点となります。

アルミ缶リサイクルの現状

リニアエコノミーでの最適解:資源循環で改善の余地がある



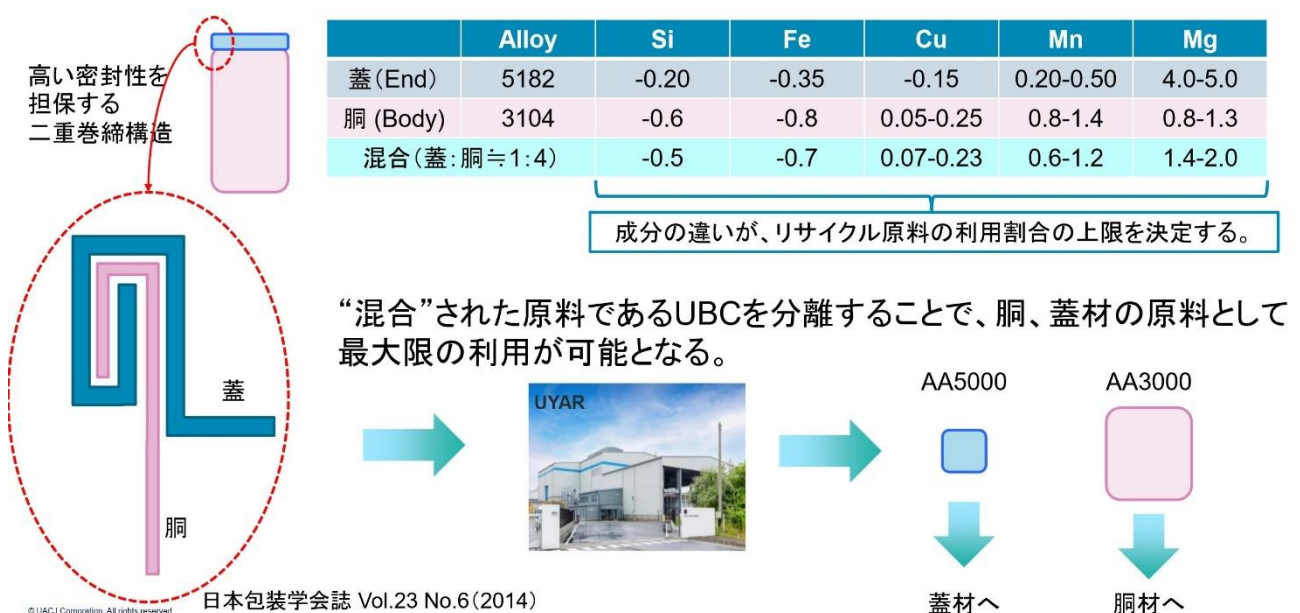
© UACJ Corporation. All rights reserved.

19

アルミ缶を使った後に胴体と蓋を分けて回収に出す方はいらっしゃるかと思います。当然ながら、二つの合金が混合された状態でリサイクルの資源となっております。

現状では、この混ぜられた状態であり、リサイクルでは胴体の部分にリサイクル材を多く使うことができる一方、蓋の部分に使うのは一定の制限がございます。リサイクル原料の割合でいいますと、胴体が高く、蓋の部分が低いという状況となっております。

エンド・ボディ分離工程がリサイクルに与える影響

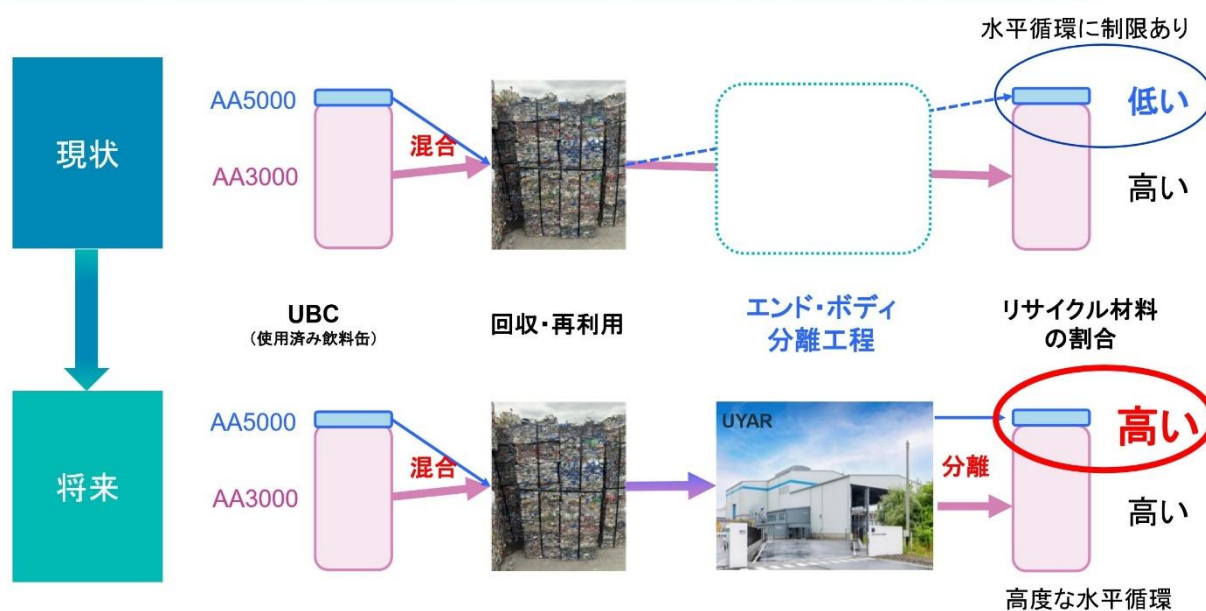


© UACJ Corporation. All rights reserved.

この表にはより詳しく、典型的な元素の種類と割合を示しています。

胴体と蓋は先ほど申し上げたように、非常に強く結合をしているような状況で、これにより密封性を保っております。本ご紹介をさせていただく UYAR においては、この蓋と胴体の部分をうまく分離することによって、リサイクルの水平度を高めるということを実現いたします。

UACJ山一アルミ缶リサイクル(UYAR)がリサイクルに与える影響



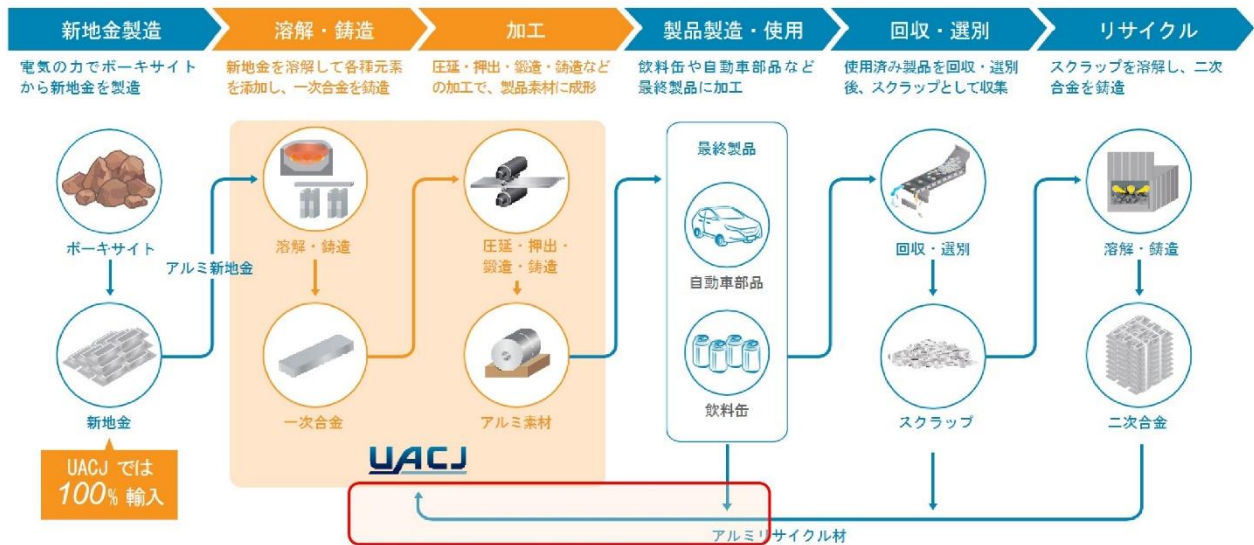
21

こちらが、その違いを示した図となります。

現状では、先ほど申し上げたように分離ができないために、リサイクルに一定の制限がございます。

その一方で、将来はこの分離技術によって蓋、もしくは胴体それぞれの部分で、それぞれに適したリサイクル原料を使うことができ、製品全体としてのリサイクル材料の割合を高めることができます。

資源循環の最前線



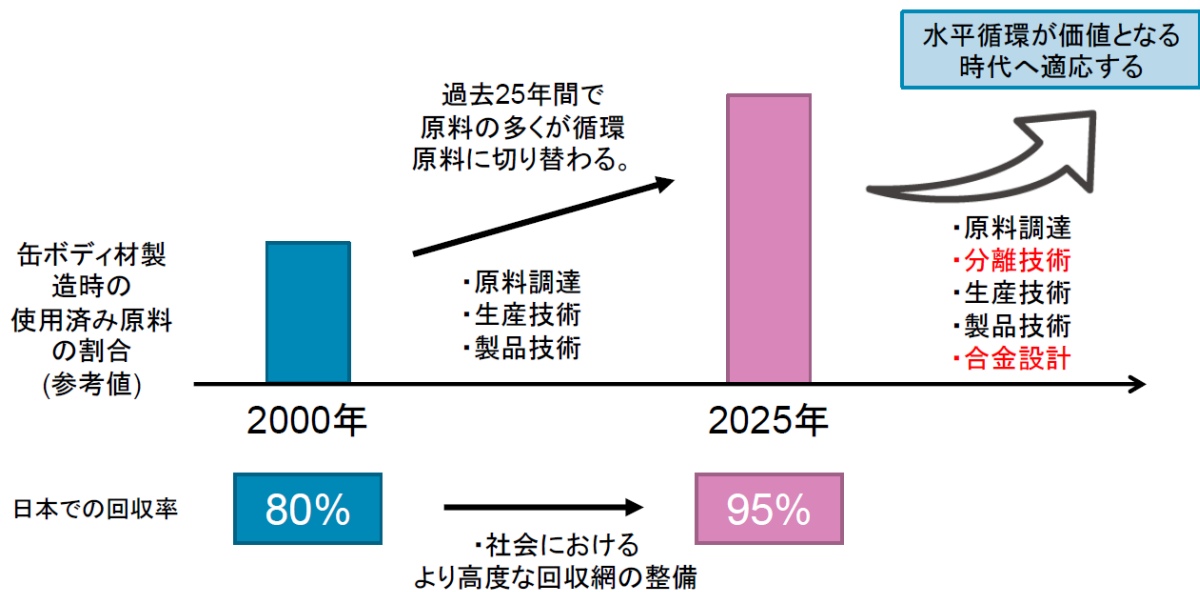
© UACJ Corporation. All rights reserved.

22

アルミの循環の図を、もう一度掲載したものとなります。

赤囲みの中、循環資源をより多く使おうとすると、この UYAR が生み出す価値がございします。

蓄積した競争力「素材の力を引き出す技と術」



© UACJ Corporation. All rights reserved.

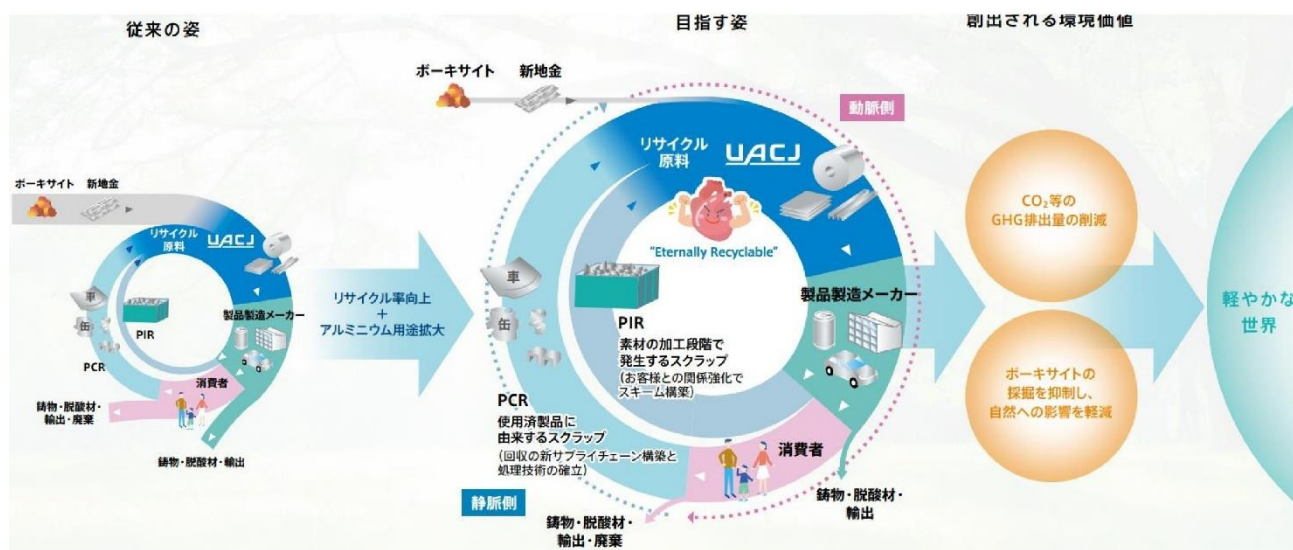
実際に、そうしたことが可能なのかについて、簡単なデータをご紹介します。

こちらは、25年前と現在において、典型的な缶ボディ材における使用済み原料の割合を示しております。

およそ 3 分の 1 程度であった使用済原料の割合が、現在では 4 分の 3 以上に達しております。日本の回収率の向上に足並みをそろえ、弊社におきましても、原料調達・生産技術・製品技術の組み合わせによって、二次原料を使いこなす技術を磨いてまいりました。

今後、水平循環が新たな価値になる時代に入っております。そのような中で、われわれのこうした技術が、より生きてくるものと考えております。

まとめ:アルミ資源循環の心臓としての役割



最後、まとめとなります。

これまでも何度もこの図をご紹介させていただいております。

今までボーキサイト、それから製錬に頼っていたこのアルミニウムの世界が、次第に循環原料を利用するようになっております。UACJは、アルミニウムの循環の心臓の役割を担うということを、社会への大きな貢献の一つと考えております。

私からのご説明は以上となります。ご清聴いただきましてありがとうございました。

須藤：野瀬さん、ありがとうございました。

続きまして、資源循環の最前線ー缶材マーケットにつきまして、森脇さん、よろしくお願いいたします。

目次

1

- ・アルミ缶生産量と成長予測(ワールドワイド)
- ・当社販売の見通し

2

- ・国内アルミ缶材の事業環境分析
- ・アルミの環境優位性と缶材ビジネスの在り方

1

森脇：資源循環の最前線－缶材マーケットの現状につきまして、森脇からご説明させていただきます。

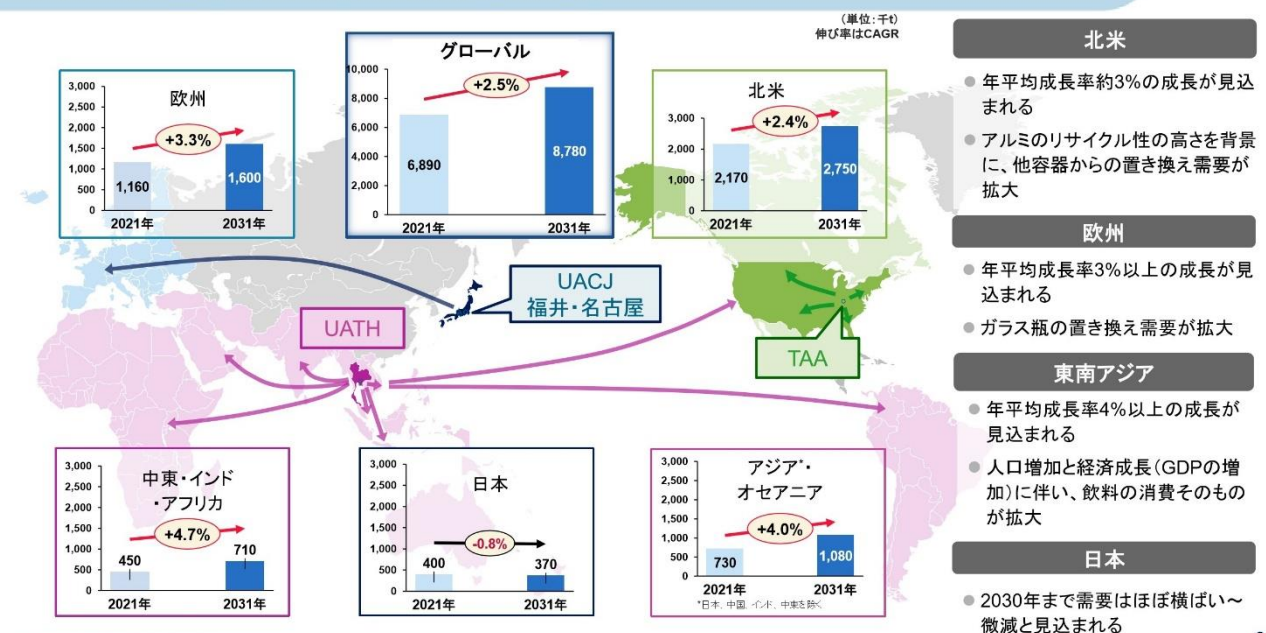
目次となります。

2部構成で進めさせていただきたいと考えております。

一つ目、アルミ缶生産量と成長予測というところと、それに関わる当社の販売見通し、そして二つ目といったしましては、国内アルミ缶材の事業環境分析と、アルミの環境優位性と缶材ビジネスの在り方です。

アルミ缶材需要予測と主な供給拠点

FY26Q1 決算説明会資料再掲



3

こちらは、アルミ缶材需要予測と主な供給拠点となります。

アルミ缶のマーケットですが、足元 4,500 億缶程度のところがございますが、グローバルでは 2021 年から 31 年で年平均成長率 2.5%を見込んでおります。

北米につきましては、年平均成長率が約 3%と見込んでおりまして、ここはアルミ缶のリサイクル性の高さを背景に、他容器からの置き換え需要が拡大。

ヨーロッパにつきましては、年平均成長率 3%以上が見込まれておりまして、こちらはガラス瓶の置き換え需要が拡大していくと見ております。

東南アジア・オセアニア、中東・インド・アフリカ、グローバルサウスの部分につきましては、年平均成長率で 4%以上の成長が見込まれると見ておりまして、人口の増加と経済成長と GDP の増加に伴い、飲料の消費そのものが拡大。

一方、日本につきましては、人口減などにより、ほぼ横ばい、微減と考えております。

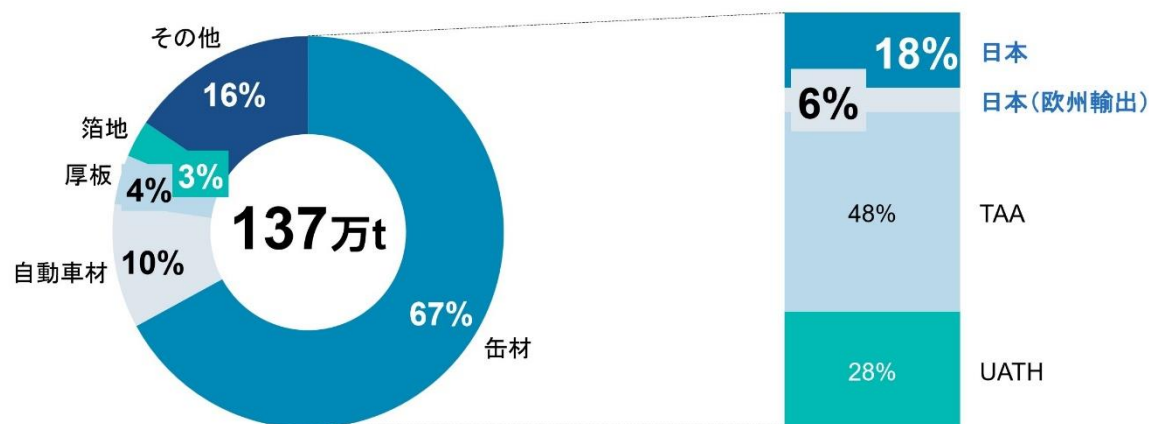
アルミ板品種別販売数量

2026年度 アルミ板品種別売上割合

アルミニウムの需要拡大に応じ、販売数量も拡大傾向
2026年度のグループ全体での販売数量は過去最大を計画

缶材 販売数量の内訳

日本国内は少子高齢化、物価高の影響により需要は横ばい
～微減見通し。需要旺盛な欧州向けの出荷を拡大する計画



© UACJ Corporation. All rights reserved.

4

弊社のアルミ板製品の品種別販売量の見込みになります。

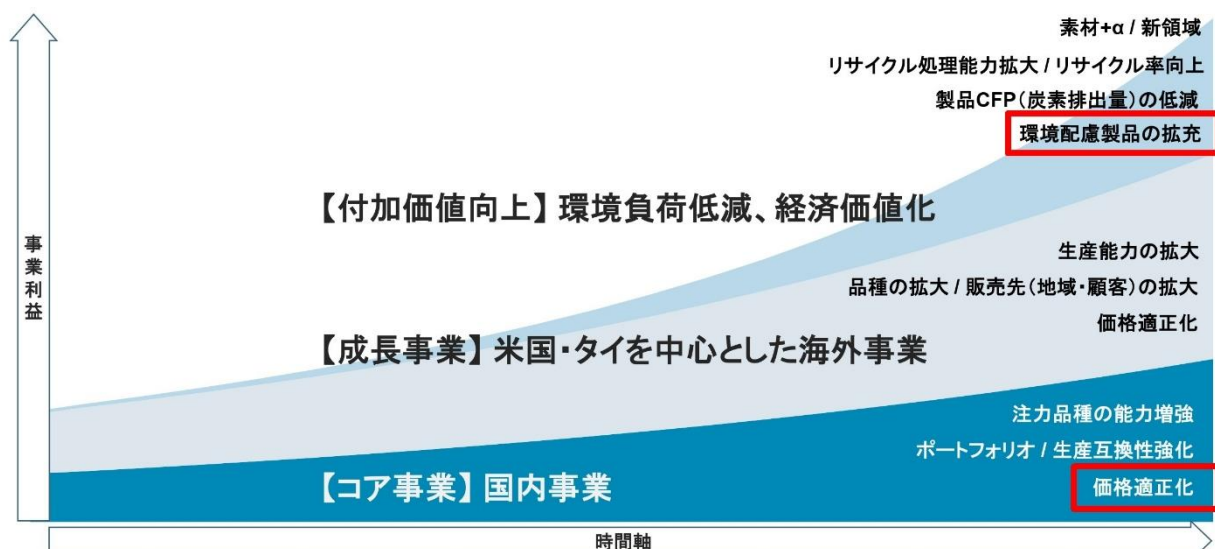
アルミニウムの需要拡大により、2026 年度のグループ全体での販売数量は、過去最大の年間 137 万トンで、大部分を占める缶材につきましては、全体の 3 分の 2 に相当します 67%、自動車材が 10%、厚板、箔地と続いています。

缶材の販売数量の内訳といたしましては、日本が、国内向けが 18%、輸出向けで 6%の合計 24%、アメリカの TAA がほぼ半分の 48%、残りの 28%を UATH となります。

日本国内の市場は少子高齢化、物価高の影響によりまして、需要は横ばいから微減の見通しですが、需要旺盛な欧州向けの出荷を継続していく計画です。

板事業の成長戦略

拡大する需要と環境負荷低減で事業成長を図る



続きまして、国内アルミ缶材の事業環境分析と、アルミの環境優位性と缶材ビジネスの在り方について、解像度を高めていきたいと思います。

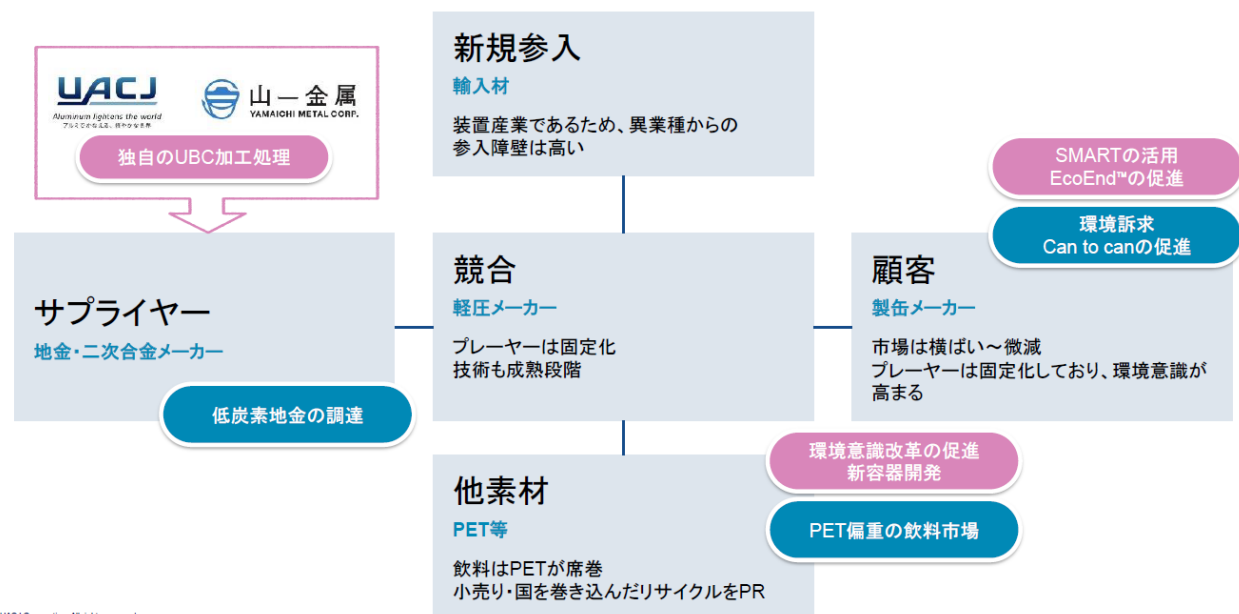
まず板事業全体の成長戦略であります。拡大していく需要と環境負荷の低減で、事業の成長を図って参ります。

コア事業といたしましては、国内の板事業での注力品種の能力増強、ポートフォリオ/生産互換性の強化とともに、価格適正化に力を入れて進めております。

成長事業といたしましては、広がっていく海外市場に対して米国・タイ拠点から海外展開を進めています。生産能力の拡大、品種の拡大/販売先（地域・顧客）の拡大、価格適正化を進めております。

付加価値向上の観点では、環境負荷の低減、経済価値化により、素材+α、周辺の新領域を広げ、リサイクル処理能力拡大、リサイクル率向上、製品 CFP の低減、環境配慮製品の拡充に力を入れております。

国内市場 事業環境分析



7

飲料缶市場の事業環境分析になります。

まず、サプライヤーについてですが、再生可能エネルギーを使った低炭素の地金を調達するところに加え、この福井製造所にございます、山一金属様との協業で、独自の UBC 加工処理を開始しております。

新規参入については、装置産業でございますので、異業種からの参入障壁は高いと見ております。輸入材という観点でも、足元の円安の状況は、一つの参入障壁-であると考えています。

競争については、国内の軽圧メーカーは、プレーヤーは既に固定化されており、既存の技術は成熟段階に入っていて、大きな動きはないと見ております。

他素材では、PET 等は、飲料市場では非常に偏重的な状況で、経済合理性が高いと考えておりますが、小売や国を巻き込んだリサイクルを PR してる中、われわれが、いかに、環境意識改革の促進や新容器開発を進めていくかというのがキーになると考えています。

顧客については、製缶メーカー様は、市場は横ばい・微減、プレーヤーが固定化している中で、環境意識が非常に高まってきておりますので、ここに対して ALmitas SMART や EcoEnd™の促進、環境訴求しながら CAN to CAN の意識を高めていきたい。

アルミ缶ブランドのさらなる普及に向けた取り組み

付加価値製品の提案



- ✓ リサイクル率向上、温室効果ガス削減を実現する環境負荷低減製品による差別化 (SMART, EcoEnd™)
- ✓ 競合と比較し、付加価値材の製造キャパシティが大きいことも差別化要素

裾野拡大



- ✓ 技術協力や幹部間の人材交流等を通じ、従来からリレーションを築いている顧客から、継続的な受注を獲得
- ✓ 企業・国・自治体を巻き込んだ新たなリレーションを構築
→ アルミ飲料容器の裾野を拡大
(アルミカップ、アルミボトル)

© UACJ Corporation. All rights reserved.

われわれが行っている、アルミ缶ブランドのさらなる普及に向けた取り組みというところで、解像度を上げて説明させていただきたいと思います。

大きく二つ、付加価値製品の提案と裾野拡大がございます。

一つは、ALmitas SMART、環境配慮製品の具体的なアイテムである EcoEnd™、リサイクル率の向上と温室効果ガス削減を実現する、環境付加価値製品による差別化です。競合と比較し、付加価値材の製造キャパシティの大きさと、差別化を進めていきたいと考えています。

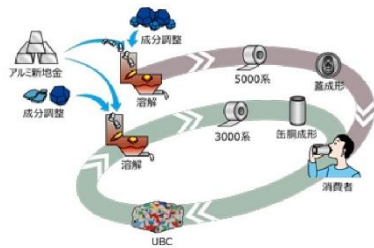
裾野拡大については、パイを広げる活動になりますが、既存の技術協力や幹部間の人材交流を通じて、従来からのリレーションを築いているお客様から継続的な受注を獲得していくとともに、企業・国・自治体を巻き込んだ、新たなリレーションを構築し、アルミ缶の飲料の容器の裾野の拡大に注力しています。

次のページから、この EcoEnd™ と、アルミ缶の普及推進について、詳しくご説明していきます。

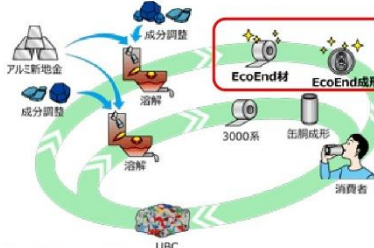
次世代の飲料蓋「EcoEnd™」の拡販

温室効果ガスを約4割削減したEcoEnd™の市場投入が拡大中

現在のアルミ容器材の循環フロー



「EcoEnd™」が提案する新しい循環フロー



EcoEnd
made with a new endless loop



- ✓ 東洋製罐株式会社と共同で、製造工程で発生する温室効果ガスを約4割削減した飲料缶用の蓋「EcoEnd™」を開発
- ✓ 蓋の厚みに変更がないため、飲料充填後に蓋を取り付ける設備変更も不要
- ✓ 本格量産のフェーズとなり、市場投入が拡大中

9

次世代の飲料蓋の EcoEnd™ の拡販になります。

こちらはホームページでも既にご存じかと思いますが、温室効果ガスを約 4 割削減した EcoEnd™ の、市場投入が拡大中でございます。

東洋製罐株式会社様と共同で、製造工程で発生する温室効果ガスを 4 割削減した飲料缶用の EcoEnd™ を開発、蓋の厚みに従来のものから変更がないために、飲料の充填時に蓋を取り付ける設備も変更不要です。本格量産のフェーズとなり市場投入が拡大し、全国でお求めいただけるようになっております。

アルミ缶普及推進のための取り組みについて

課題と目的:

人口減や値上げ疲れによる買い控え、若年層のアルコール離れに伴い、アルミ缶需要は低下の一途。一方、PET需要は欧米の動きと相反して堅調。アルミ缶需要の裾野拡大を企図。

大目標

アルミ缶の普及を通じて、軽やかな世界を実現する

活動方針

アルミ缶が当たり前を選択される世の中に(現状水やお茶は殆どお店で買えない...)

▶ アルミ缶の環境優位性の認知向上とイメージアップを図り、更にはその採用を後押しする施策を推進中

取り組み具体例:

【無地アルミボトル缶ウォーター】

- ✓ オリジナルデザインを100本単位で提供可能
- ✓ 「アルミボトル缶を使ってみたいが、最低ロットが大きいと手が出ない」という声を受けて実現したプロジェクト
- ✓ 最初の高いハードルを下げることで、ボトル缶の良さを体感後の採用拡大の弾みとした
- ✓ 循環や海洋プラスチック問題解決の担い手として採用拡大中



【アルミカップ】

- ✓ オリジナルデザインを用い、各種イベントなどでの活用拡大を推進
- ✓ 循環を実感できる環境優位性とアルミの持つ冷涼さで好評
- ✓ 各種イベントなどで人気を博す



© UACJ Corporation. All rights reserved.

アルミ缶の普及の推進のための取り組みについてです。

課題と目的というところでございますが、人口減や値上げ疲れによる買い控え、若年層のアルコール離れに伴い、アルミ缶の需要は低下をたどっていると考えております。一方で、ペットボトルの需要は、欧米の動きとは相反して堅調で、アルミ缶の需要の裾野拡大を企画しています。

大目標といたしましては、アルミ缶の普及を通じて、軽やかな世界を実現する。アルミ缶が当たり前を選択されるような世の中に。現状、飲料水やお茶がほとんど缶に詰められたものは、なかなか店頭で買えませんが、当たり前手に取って頂ける環境を増やしていきたい。

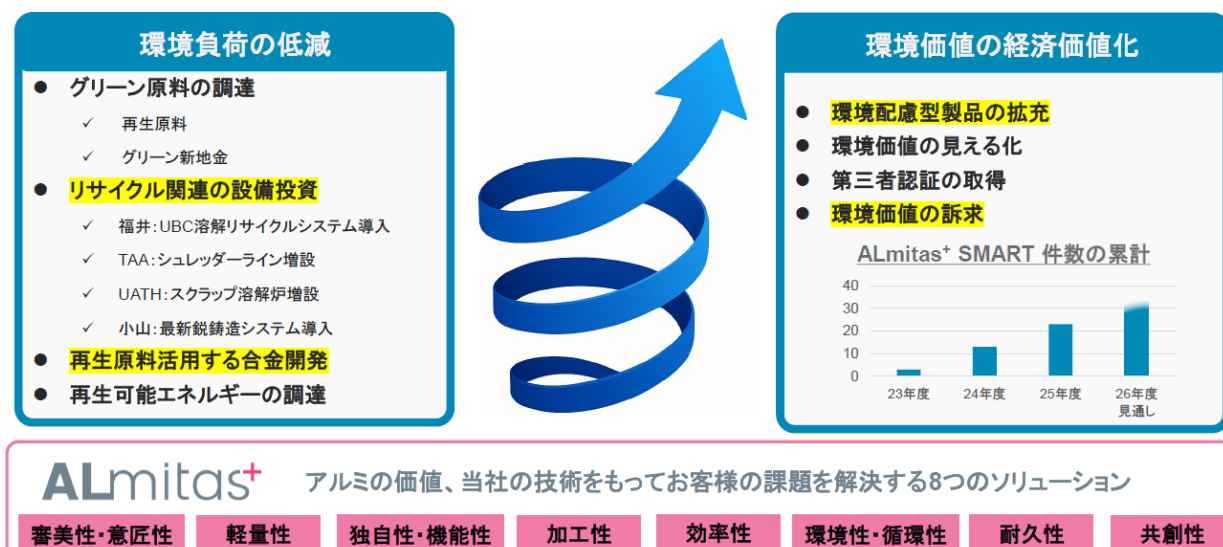
アルミ缶の環境優位性の認知向上とイメージアップ、あとは、その採用を後押しするような施策を推進しております。

取り組みの具体的な事例といたしましては、無地のアルミボトル缶ウォーターです。こちらは、オリジナルデザインを、100本単位で提供が可能という仕組みをつくっております。今までアルミボトル缶を採用してみたいと思われるお客様も、最低のロットが大きく、二の足を踏んでしまっていた声を受けて実現したプロジェクトになります。ハードルを下げることによって、ボトル缶の良さを体感して頂き採用拡大の弾みとして、年々拡大しています。

アルミカップにつきましては、オリジナルデザインを用いて、各種イベントで人気を博しています。

「素材+α」の環境価値の創出

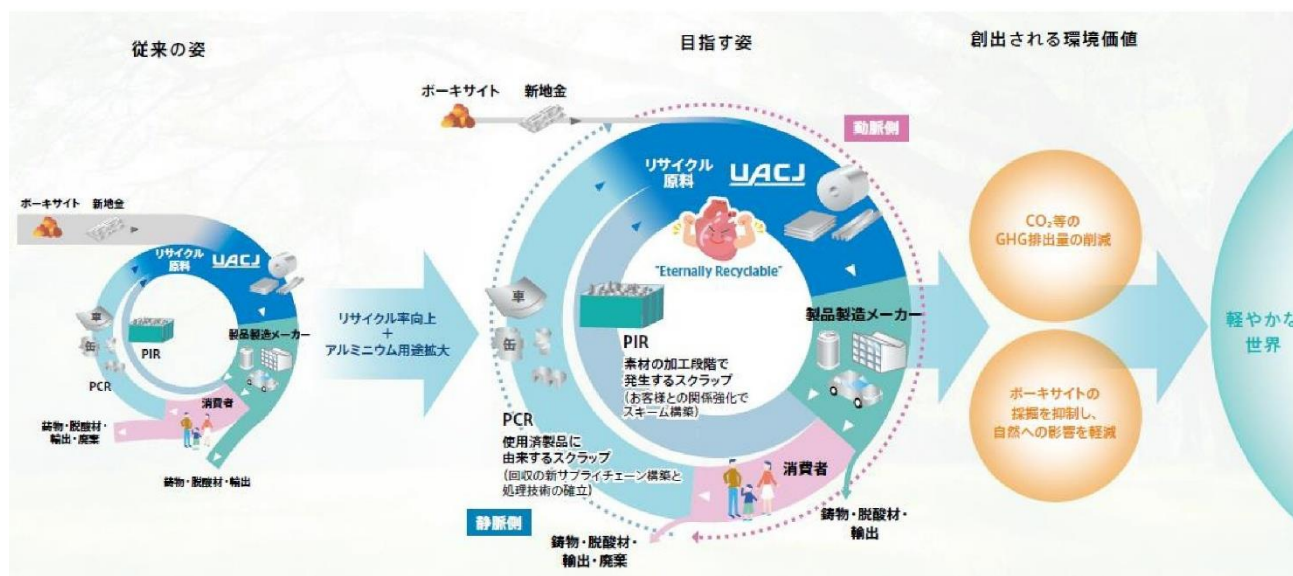
環境負荷の低減で生み出された環境価値の経済価値化を推進中



環境負荷の低減では、グリーン原料の調達のみならず、リサイクル関連設備に投資をして、リサイクル原料を、いかに使いこなしていくかというところを考えています。再生原料を活用する合金開発が、先ほどのEcoEnd™です。

環境価値の経済価値化では、環境配慮型製品の拡充、環境価値を見える化していくことで、手触り感をお客様に得て頂き、第三者認証の取得などで、お客様のご要望にお応えし、環境価値の訴求を行っていきたいと考えています。

社会課題の解決 - アルミで創る循環の輪～サーキュラーエコノミーの心臓へ



© UACJ Corporation. All rights reserved.

12

最後に、先ほど野瀬のパートで出てまいりましたが、社会課題の解決というところで、今までの従来の姿を循環型にし、パイを広げていくことで創出される環境価値を社会に還元していきたいと考えております。

以上でございます。ご清聴ありがとうございました。

須藤：森脇さん、ありがとうございました。

質疑応答

須藤 [M]：これより、皆様からのご質問をお受けいたします。

山口 [Q]：SMBC 日興証券の山口でございます。

まず 1 問目、1 のほうの資料の 21 ページ目ですか、この水平の環境投資をしていく、区別が決め手になるというお話だったと思いますが、私たちは素人なので技術的にどういうところ、これ、難しかったのだけど、どういうふうにして克服していくと見られてるのか、お話できる範囲で技術的なことを教えていただけるとうれしいです。

須藤 [M]：1 問目をお答えいたします。野瀬から。

野瀬 [A]：ご指摘いただいたように、水平循環が非常にキーになるところでございます。

大きくご説明をいたしますと合金を分け、そして、それを効率よく使うところに関しまして、さまざまな生産技術上の課題がございます。それを克服して、こういった水平循環に適した使い方が実現しつつあるのが、現時点での状況となります。

山口 [Q]：御社というのは、このジョイントベンチャーの中である程度、そういっためどが見えつつあるというようなお答えでよろしいですか。将来。

坂野 [A]：先ほど野瀬が申した通りで、途中段階であります。めどが立っていますので、進めていきます。

山口 [Q]：2 点めは、山一さんの、御社の二次原料を使った製品の拡販が鍵になってくるんですが、毎年いろいろ ESG の説明会なんかで、あるいは、ご一緒させていただいたとき、北海道のビールとかをいただいたりとかして、いろいろお伺いしたんですが、その後、まだ広がりつつあるというような話もあったので、その広がりつつあるというところ、教えていただきたい。

森脇 [A]：関東圏では、ほぼビール等を中心に EcoEnd™ も、既に手に取っていただけるような状況になっておりますし、沖縄県でも販売開始となりました。既に市場投入も確認されていますので、全国どちらでも手に取っていただける状態に。

山口 [M]：私、なかなか当たりがなくて、一応お聞きしてるんですけど、なかなか当たりは今のところない。当たってくるのを待っております。

松本 [Q]：野村證券、松本でございます。

最初は、エンドとボディのところを分けるっていうのは、めどは立っているということでしょうが、いつぐらいから始めて。まず 30 年の 80% っていうのは、あれは、もしかしたら含まれてないのかもしれないですが、その辺の考え方を。

野瀬 [A] : UACJ リサイクル率の目標を立てたときに、こちらの活動は織り込んでいない状況でございました。

リサイクル率に関しましては、飲料缶は非常に高いですが、他の製品群においてはリサイクル原料が入手しにくいもの、もしくは、そもそもリサイクル原料が発生するまでに、すごく時間がかかってしまうもの、それからバッテリー用の箔材のように、リサイクル原料が使いにくいもの、などいろんな製品群がございますので、その製品ポートフォリオの影響を強く受けてしまいます。

それを全て考えた上で、UACJ リサイクル率ということで 2030 年に 80% という目標を設定しております。本件に関しましては、飲料缶においても高い数値をさらに高くするような、そういった効果があるものと見込まれます。

松本 [Q] : いつぐらいから始める感じですか。

坂野 [A] : 方策は一致しています。今の生産量 2,000 トンという枠の中で。またプラスというところを検討していこうと思っています。その中で時期も検討していきます。

松本 [Q] : 例えばアメリカのスチール・ダイナミクスさんも、80% っていう目標を立てていたり、ノベリスさんもいつだったか忘れましたが、70% とか 75 だったかと思うんですけど、いろんな会社さんが、基準が違うのでよく分からないんですけども、御社は UBC にしても、これ、リサイクル原料を使うという、この技術という点でいくと、世界の強豪に対して、どういうレベルにあるかっていうのを教えていただきたい。

野瀬 [A] : 非常に難しいご質問でございまして、各社さんが公表してる循環のそもそも、循環の指数の定義が異なるというのは、ご指摘の通りでございます。

それが、何に起因しているのかというのを考えますと、各社さん、またそれぞれの製品バリューチェーンの中で、どういった循環状態が最も適切なのかという考えが異なります。そのために各社さんの考え方によって、循環の指標自体も変わってしまっている、なかなか比較しにくいというのが実情でございます。

そのような中で、社会で求められている製品群、アルミの素材群において、それぞれでできる限り循環の状態を高めて、新地金の使用量を減らしていくのが基本的な方策になります。

それが各社さんと 1 対 1 で、どのような競争的な状況になってるかというのは、ここではお答えしにくい部分もございまして、それぞれの分野において競争がある状況でございます。飲料缶における競争の一つが、私から申し上げた、例えば ASI の認証を取得した素材が提供できるかとか、そういったものとなっております。

五老 [Q] : UBS 証券の五老です。

今のお話にも絡むところで、1 点目は、タイでも日本の拠点でもアメリカの拠点でも、御社自身としては飲料缶として、80%ぐらいのリサイクル地金使用率だという説明を伺っていて、UBC の需給についていつもお話される中では今後、常にニーズが高まっていくのでタイトな方向へ、というご説明が中心だと思う。

一方で発生量というか回収では、地域、国々で特性がそれぞれあって、アメリカなんかも今、ごみ箱リサイクルと通常と、分けたりするようになってきた都市もあると思うので、この辺り、最終の進捗について、御社自身も働きかける立場にアメリカでもあると思うんですけども、この辺りの需給バランスについて、どのように働きかけ得るか、変化があるかというところを教えていただけたら。

2 点目、これも、若干お答えづらい部分はあるかと思うんですけども、取り組まれている ALmitas、今回の EcoEnd™などの製品の浸透度というか、顧客の理解度といいますか、どれだけ価値を認めてもらうかが鍵だというお話、ずっと私たちお伺いしています。

例えばユーザーさん、飲料業界、それから製罐業界、それぞれで Scope 3 の削減計画目標というのは出されているのかなと思うんですけど、彼らのコミットに対して御社が働きかける余地のところ、十分伸ばす余地はあるような気もするんですけども、この辺り、ユーザーの認識の変化というのは最新、どういうふうに進んでいるかを解説いただけたらと思います。

野瀬 [A] : 1 点目のリサイクル率、特に回収率の向上、それから、それが缶に戻る率の向上でございますけれども、日本は世界的に見てもリサイクル率というのが高い国になります。そしてリサイクルされたアルミニウムの品質が高いと言われています。

いくつか理由の分析をしております、一つは自治体の回収が高度に発達しているということがございます。私も生活者として、洗って出すということをやっておりますし、それは日本全国でできているというのが、リサイクル率 95%といった非常に高い数値の背景になってるかと思います。

IAI の飲料缶分野の委員を務めておる中でも日本の文化的な背景が、この高い回収率につながってるというコメントは、よく聞いております。

世界に関しましては、ご指摘のように、先進国でも少し差があるような状況です。欧州では拡大生産者責任、もしくはデポジット制というような法的なルールを敷くことによって、回収率を上げることに成功しつつあります。一方でアメリカでは今現在、リサイクル率 40%ぐらいかと思います。非常に国土が広いということもあり、まだまだ向上の余地がある国・地域だと認識しております。

法制度への働きかけ、ロビーイングというのも、非常に重要な分野と認識しております。日本においては、弊社もそうですけれども、経済産業省のサーキュラーパートナーのアルミ WG に入りまして、そしてアルミニウム協会とともに循環を深めていくというような働きかけを実施しています。

森脇 [A] : Scope 3 に関わる、炭素の削減計画についてですが、各ブランドオーナー様から少し前まではやはり経済合理性の観点から、少し時間がかかるかなということもありました。けれども、リサイクルはもう当たり前と。各社のお客様の声が高まってきております。各社から、2030 年、2050 年とそれぞれの目標が

掲げられておりますけれども、達成のためにやはりアルミニウムの循環を活用したいという、期待感を感じています。第三者認証等のニーズが少しずつ高まってきており、だいた環境に対する意識は変わってこれたと捉えております。

それらが具体化していくというところでございますので、われわれも第三者認証等のメニューをどんどん増やし、環境対応のところでしっかりと価値を提供していければと考えております。

五老 [Q]：最近、付加価値化のところ、例えば鉄鋼業界は価格想定、具体的にされているので、メジャーではないですけれども、成約事例として紹介事例もいくつかあります。その辺りの状況も。

森脇 [A]：EcoEnd™でも一定の価値を認めていただくなど、やはり我々としてはお客様に訴求をさせていたいただきまして、お互い環境配慮製品の価値をご理解いただきまして、Win-Win な関係を作っていければと考えております。

白川 [Q]：モルガン・スタンレー証券の白川と申します。

1 点目が、今の五老さんの、1 点目の質問のフォローアップというところで、今後、いろんな各社がリサイクル原料を必要となってくる中で、今でもそうですけれども、リサイクル原料の価格が上がっていて、リサイクルすることによって、需給がタイトにさらになって、マージンが、狙っていたものが取れなくなる可能性があるかなと思う。そこら辺のリサイクル原料の、需給がタイト化していることによって、マージンが取れなくなるような恐れについて、どう考えているか教えてください。

2 点目が、リサイクル全般のところで、2024 年に名古屋工場を訪問させていただいたときにアップリサイクルのところで縦型高速双ロール鋳造法っていうのを、NEDO と一緒にやっているとご紹介いただいたんですが、そこに関して技術的に何か進歩があるのかどうか。2030 年に向けて、それを実用化したいというお話があったと思うんですけれども、その時間軸について、また変化があるかを教えてください。

野瀬 [A]：コストについては開示ができませんが、社会全体が循環を求める中で何が競争軸になるかということを考える必要があります。そこで、最も合理的な水平循環を効率的に実施することができるかがポイントであり、その競争が様々な分野で起こりつつある、起こると認識しています。

その中で、リサイクル技術もさまざまあり、先ほど申し上げた EcoEnd™のような合金側で間口を広げるやり方もございますし、UYAR の中で実証してるような分離技術を活用して全体的な割合・量を拡大するというのがございます。

そうした中で考えますと、分離技術、もしくは合金の間口を広げるというのを、弊社のような板や押出等の素材メーカーが実施することに、そこには追加的な価値があり、当社に競争力があると認識をします。これは何かと申し上げますと、新地金とは違い、リサイクル原料はやはり品質の幅が必ずあるものということです。リサイクル原料を活用しながらも一定の製品の要求にどのように当てはめていくかということが問われてまして、そこで弊社が持ってるような合金の開発技術、もしくは使いこなしの生産技術というものに、その

一つ上流側に手を加え、一つ新たに武器を持つものになります。そういったトータルにコーディネートできる点で強みになります。

直接のコストに関しましては、お答えはできないですが、そこでの競争で勝っていくというのが基本的なやり方、戦略と認識をしています。

白川 [Q]：2 点目の NEDO、現状の進捗はどのようなものですか。

野瀬 [A]：NEDO 事業であり、直近の進捗を我々から開示することができないというのがお答えになります。年度ごとにまとめがございまして、資料化されますので、その公開をお待ちいただきたいと思います。

須藤 [M]：以上のご質問で最後とさせていただきます。今後のお問い合わせにつきましては、IR・広報部までお願いいたします。

これで株式会社 UACJ、アルミ缶リサイクルに関する事業説明会を終了いたします。今後も株主を始めとするステークホルダーの皆様のご期待に沿えるよう邁進してまいりますので、引き続き弊社をご支援ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

本日はお忙しい中、お集まりいただき、誠にありがとうございました。

[了]

脚注

1. 音声不明瞭な箇所に付いては[音声不明瞭]と記載
2. 会話は[Q]は質問、[A]は回答、[M]はそのどちらでもない場合を示す

免責事項

本資料で提供されるコンテンツの信憑性、正確性、完全性、最新性、網羅性、適時性等について、株式会社 JPX 総研（以下、「当社」という）は一切の瑕疵担保責任及び保証責任を負いません。

本資料または当社及びデータソース先の商標、商号は、当社との個別の書面契約なしでは、いかなる投資商品（価格、リターン、パフォーマンスが、本サービスに基づいている、または連動している投資商品、例えば金融派生商品、仕組商品、投資信託、投資資産等）の情報配信・取引・販売促進・広告宣伝に関連して使用をしてはなりません。

本資料を通じて利用者に提供された情報は、投資に関するアドバイスまたは証券売買の勧誘を目的としておりません。本資料を利用した利用者による一切の行為は、すべて利用者の責任で行っていただきます。かかる利用及び行為の結果についても、利用者が責任を負うものとします。

本資料に関連して利用者が被った損害、損失、費用、並びに、本資料の提供の中断、停止、利用不能、変更及び当社による利用者の情報の削除、利用者の登録の取消し等に関連して利用者が被った損害、損失、費用につき、当社及びデータソース先は賠償又は補償する責任を一切負わないものとします。なお、本項における「損害、損失、費用」には、直接的損害及び通常損害のみならず、逸失利益、事業機会の喪失、データの喪失、事業の中断、その他間接的、特別的、派生的若しくは付随的損害の全てを意味します。

本資料に含まれる全ての著作権等の知的財産権は、特に明示された場合を除いて、当社に帰属します。また、本資料において特に明示された場合を除いて、事前の同意なく、これら著作物等の全部又は一部について、複製、送信、表示、実施、配布（有料・無料を問いません）、ライセンスの付与、変更、事後の使用を目的としての保存、その他の使用をすることはできません。

本資料のコンテンツは、当社によって編集されている可能性があります。